

安楽寺だより

第32号

紙面内容

- 2面 二十二組同朋講座が始まる
- 3面 お盆墓法要(同時中継)
- 4面 日本仏教史⑮ 大正時代

編集・発行 安楽寺住職 吉田 和良
 名古屋市瑞穂区井戸田町一の八〇
 電話 〇五二(八四一)二六〇六

二河白道のたとえ その⑥

「出口なき自力のこころ」

親鸞聖人が大切にされた善導大師の「二河白道のとえ」のおはなしは、浄土を求める行者の自分自身への問いかけが続きます。

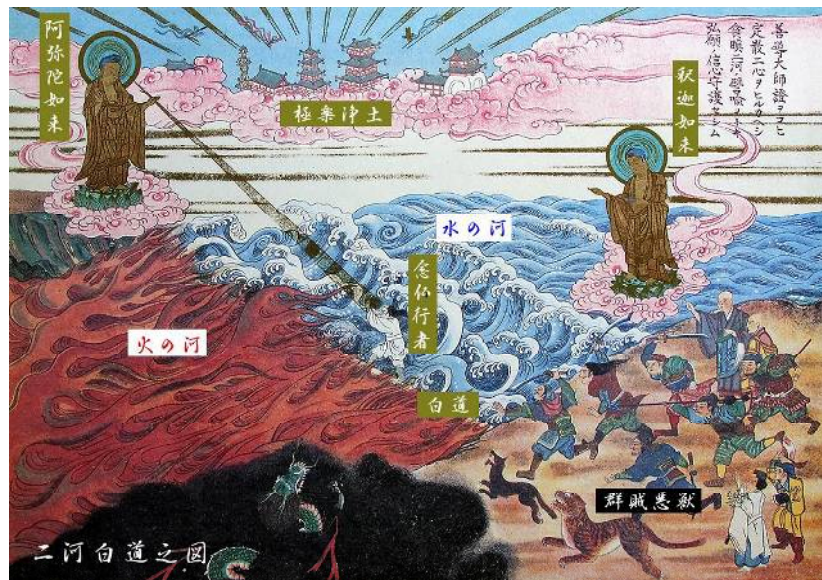
第一に「到りかえらんと欲すれば」は、浄土を求めるところがありながら、「群賊悪獣来り」と世間的な考えの誘惑によつて、浄土の教えを聞く以前の日常的なところに後戻りする、つまり引き返すのです。

第二に「南北に避(さ)り走らんと欲すれば」とは、日頃の自分のところを脱却して、理想の自分を実現しようとする、「悪獣毒虫競い来る」として、理想の自分を求めることは、煩惱を丸ごと生きているという「身の事実」には出ていきません。理想主義は、まことに虚しいものなのです。

第三に「西に向かいて道を尋ねて去(ゆ)かん」と欲すれば」とは、今自分が生きている生死の世界を自分の力で超えようとする、「水火の二河に墮(だ)せん」とつまずき、(むさぼり)と瞋(いか)りの二河に道を奪われ飲み込まれ、歩むべき道が絶たれてしまっています。

この浄土を求める行者の三つの行動は、いづれも自分の体験や理想にしばられて、それ以上進めないのです。自力のこころで

「正しく到り回(かえ)らんと欲すれば、群賊悪獣漸(すす)んじり逼(せ)む。正しく南北に避(さ)り走らんと欲すれば、悪獣毒虫競い来りて我に向かう。正しく西に向かいて道を尋ねて去(ゆ)かんと欲すれば、また恐らくはこの水火の二河に墮(だ)せんことを」時に当たりて惶怖(こうふ)する・・・



は、「どの道を選ぼうとも死を逃れることはできない」と確信します。

この行者には、いかなる道を選択があるのでしょうか。今回は、この人が進むべき道を明らかにする本題になります。

歎異抄に学ぶ

四年前から始まりまして、二十二組真宗同朋講座は、今年度も開催されています。

「歎異抄」の教えをテーマに礫朋寺住職・小川正幸師から講話をお聞きしています。第一回は先月十一日に二十二組各寺院のご門徒の皆様三十名が出席されました。



小川正幸師の講話の様子（安楽寺会館にて）

親鸞聖人は、九十年のご生涯をかけて、多くのおしえを残してくださいました。聖人が亡くなられて数十年ののち、聖人がお述べになられたおしえの中で、特に念仏往生・信心について、聖人のおこころに背く誤った理解が主張される事態が起こりました。

これを悲しみ、このような事態に責任を感じた一人の聖人の門侶が、聖人のおしえが正しく受け継がれることを願い、聖人の大切なお言葉をまとめ、さらに誤った教法を批判して書き表したのが「歎異抄」です。（唯円作と云われています。）

わが身は「煩惱具足の凡夫」

↓私自身を得ることと言うことができます。

第六章に『如来よりたまわりたる信心』とのお言葉があります。これは、往生の一大事を決めるものです。独立自尊の開かれた人生をすべての人に平等に与えるところ根を表すものです。信ずることのまえでは、老少善悪の選びも、男女貴賤の別も何の意味もなく、信ずる者として人間は平等なのです。

しかし、注意すべきは信心を同じくするとおの言葉は、誤って受けとめれば、各人の自立性を奪ってしまうことになりす。これは信心を得ようと集う人々を非主体的な群衆にか

高校の歴史教科書にも記述されています『善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや。・・・他力をたのみたてまつる悪人、もつとも往生の正因なり』（第三章）

自分が善い行いをできると思っている善人は、往生を得ることができ、ましてや本願を信じ、自分が真実に背く罪悪の身と自覚している人は、往生を得ることは当然のことです。

念仏のおしえに遇うということ、つまり信を得ることは、何か特別なことを得ることとなく、本当の私自身に遇い、本当の

えてしまいかねません。また信を得て救われた気になることは、人間が見失ってはならない自由と自立の精神を無くしてしまう危険性があります。『さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし』（第十三章）と、わが身は、このような身であると受け止める。わが身は『煩惱具足の凡夫』と気付き、残りの人生を『往生は一定』と領く。ここに浄土のおしえが開かれてきます。

真宗同朋講座は、これからも続きます。ぜひとも学びの場へお出かけ下さい。

お盆墓法要を勤める

会館で同時中継



安楽寺会館でのお焼香の様子

七月十五日(日)お盆墓参りを八事霊園安楽寺墓地で行いました。

当日は、朝から真夏の太陽が照りつけ、汗が拭いても拭いても出てきました。そんな中、十時頃より供養墓参詣の皆様にご挨拶とお集まりいただきました。

今回の墓参りの様子は、初めての試みとして、ラインを利用して、安楽寺会館で同時中継いたしました。お墓参りに出かけるには、体力的に難しいとか、お仕事などで時間的に墓参は困難な皆様には、墓参りの様子を安楽寺会館に設置した大型スクリーンで同時中継し、お参りしていただけるよ

うに企画いたしました。午前十時三十分から、墓前でお勤めをする中、八十名程のご参詣の皆様には、ご先祖の方々に想いをはせながら、ご焼香をしていただきました。お暑い中、ご参詣頂きました皆様、大変有難うございました。



今年も東別院「夏のつどい」を開催します



夏のつどいの食事の様子

私がこの「夏のつどい」に携わらせてもらって一〇年以上になりました。昨年からは企画を任せられることになりました。

今年も「伝える喜び、伝わる楽しさ」パネルシアターを通して」というテーマで、伝えるということの大切さをみんなで考えていきたいと思います。

昨今はパソコンや携帯電話などで人と人がつながる形がかわってきました。メールの文字なら相手にうまく伝えられるのに、面と向かって話すという言葉に詰まり、話がうまくできない。でも緊張して言葉が出てこないということは、その時・その相手を大切に思っていることではないかと、私は思います。

伝えるということは、一方的な意見や言葉ではなく、相手の言葉を聞くこと。そしてお互いがその時間を大切に思う心をもつこと。それを限られた一泊二日の中で子供たちと一緒に考えていけたらと思います。

若院

毎年、子供たちの夏休みに名古屋東別院で「夏のつどい」を開催しています。子供たちと一緒に仏教について学び、楽しく、そしてみんな仲良く協力しながら日程を過ごしていきます。今年も八月二十一日～二十一日の一泊二日で行います。

仏教豆知識

第三十二回



日本の仏教

歴史 その⑮

大正時代

大正時代になると、自由・民主の風潮が高まって、自由民権運動が推進され、いわゆる大正デモクラシーの時代を迎えました。

この大正デモクラシーは、思想や文化に大きく反映し、人間解放・人間平等の運動へと拡がりをもせて、労働者・農民・婦人・部落などの解放運動が全国に浸透していききました。

各仏教の教団組織は、宗派の枠を越えて、通仏教的な立場で哲学的な研究が行なわれました。また宮澤賢治などの文学者たちにより、数多くの仏教的作品が著わされ、仏教文学の全盛期を作り出しました。

資本主義の発達は、一方で貧富の格差

を大きくし、社会不安が増しました。この時、仏教界が取り組んだ貧民救済や児童保護、医療保護等の社会事業などは大きな役割を果たしました。また、被差別部落問題では、田中松月や西光万吉などの熱意ある僧侶たちによって、各地に運動組織が確立し、民主的教団への改革が主張されました。



宮澤賢治 (1896 - 1933)

お詫び

先回(三十一号)4面の記事の中で、映画監督・高畑勲さまのお名前を高野勲と誤って記述しました。お詫びして訂正させていただきます。

現在の日本には多くの宗教・宗派があり、何を信仰しても、自由な時代です。▼しかし、街中や学校などには、親しげに話しかけてくる宗教団体(ヨガなどのサークルを名のる場合も)があります。誘い話にのってしまおうと、抜き差しならなくなってしまうこともあります。充分に気を付けて下さい。▼浄土真宗は、阿弥陀仏の御本願の教えを信念を持って歩まれる「よき人」との出遇いを願い、人間として生きていく宗(むね)をお伝えすることを大切にしていまいりました。▼親鸞聖人は、「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひと(法然上人)のおおせ」(歎異抄第二章)を、そのままだただかれました。▼聖人が、比叡山での二十年にも及ぶご修行の後、苦悩の日々を送られる中で法然上人と出遇われたお姿を、真宗に縁をいただく一人として、常にこのころの底に持ち続けて歩まなければならないと思います。